

27U-am01S

Streptococcus agalactiae が分離された診療科と分離菌の特徴

○鈴木 雅恵¹, 輪島 丈明¹, 野口 雅久¹ (¹東京薬大・薬・病原微生物)

[目的] Lancefield 分類で B 群に分類される *Streptococcus agalactiae* (Group B streptococci, GBS) は、ヒトの腸管や膣に常在する一方で、出産時の産道感染により新生児に重篤な感染症を引き起こすことが知られている。また、成人に対しては敗血症や尿路感染症の原因となりうる。つまり、院内で分類される GBS に多様性があることが推測される。そこで本研究では、GBS が分離された診療科と薬剤耐性率や莢膜型との関連を検討したので報告する。

[方法] 2013 年から 2015 年までに東京都内の大学病院で分離されたβ溶血性レンサ球菌 590 株のうち、Lancefield の分類で B 群となった 395 株を使用した。莢膜型・薬剤耐性遺伝子は PCR 法により決定した。最小発育阻止濃度 (MIC) は、微量液体希釈法で測定した。

[結果・考察] GBS が検出された診療科は産婦人科が 28.6%、泌尿器科が 17.5%、救急救命部が 11.1% の順であった。Macrolide 耐性率は、産婦人科が 28.3% と最も高かった。一方、Qinolone 耐性率とβ-lactam 低感受性率は救急救命部でそれぞれ 31.8% と 27.3% で最も高かった。莢膜型は、産婦人科では III 型と V 型がそれぞれ 21.2%、20.4% で多く、泌尿器科では III 型と Ib 型がそれぞれ 24.6%、18.8% であった。一方、救急救命部では Ia 型が 25% と最も高かった。本研究から、それぞれの診療科で分離される株の特徴が異なっていることが明らかとなった。救命救命部では重篤な患者が多いため、Ia 型株の病原性が高い可能性がある。また、この診療科由来株は他科と比べ耐性傾向が強いことから、アンチバイオグラムなどを作成し、適切な薬剤選択をする必要がある。